赤血球自己抗体を保有する不規則抗体陽性症例に関する後方視的解析

◎竹信 莉子[1)]、菅野 光一[1)]、下山 瑞貴[1)]、松田 留美子[1)]、佐々木 かよ子[1)]、新井 祐司[1)]、松縄 学[2)]、木村 聡[3)]
昭和大学横浜市北部病院 臨床病理検査室[1)]、昭和大学横浜市北部病院 内科[2)]、昭和大学横浜市北部病院 臨床病理診断科[3)]

【背景】赤血球自己抗体（以下、自己抗体）は免疫機構の破綻により産生される自己赤血球抗原を認識する抗体であり、自己抗体を予後不良因子とする報告がある。
【目的】自己抗体を保有する不規則抗体陽性症例の患者背景に関する報告は少ない。本検討はこの点を明らかにすることを目的とした。
【対象・方法】2016 年 4 月から 2023 年 3 月の不規則抗体陽性 369 症例（重複なし、年齢中央値 65 歳、性別：女性 255 例、男性：114 例）を対象に、自己抗体保有の有無によって陽性群と陰性群に群別し、不規則抗体の種別頻度・原疾患・予後との関連性について後方視的に解析を行った。
【結果】自己抗体保有例（陽性群）は、不規則抗体陽性 369 例中 57 例（15.4%）であった。不規則抗体の内訳は、陽性群が抗 E：9 例（15.8%）、抗 c：5.3%、抗 Dia：3.5%、陰性群が抗 E：104 例（33.3%）、抗 M：11.9%、抗 Fyb：7.1%で、両群ともに抗 E が最も頻度が高く、陽性群は陰性群と比較し有意（χ2test p=0.03）に抗 E の頻度が低かった。陽性群の疾患別の割合は、血液疾患（悪性リンパ腫 6 例、自己免疫性溶血性貧血 4 例、突発性血小板減少性紫斑病 4 例、骨髄異形成症候群 2 例、赤芽球癆 1 例）が 17 例（29.8%）と最多で、次いで悪性腫瘍 9 例、炎症性疾患 8 例、腎疾患 5 例、自己免疫疾患 4 例、心疾患 2 例、その他 12 例であった。血液疾患の割合は、陰性群の 12 例（3.8%）に対し有意（χ2test p<0.0001）に高頻度であった。また、Cox 比例ハザードモデルで単変量解析を行ったところ、陽性群は全死亡リスクと有意（HR:1.81、95%CI:1.04～3.13、p=0.04）に関連した。陽性群と陰性群の生存期間の比較では一般化ウィルコクソン法で有意（p=0.04）に予後不良であったものの、ログランク法では有意な層別化は認められなかった。
【総括】血液疾患患者で自己抗体保有率が高いことから、臨床への自己抗体検出の情報提供は血液疾患診断の一助になり得ることが示唆される。生存期間に関しては更に調査期間を増やし症例の蓄積と解析をすることにより、自己抗体保有が独立した予後不良因子になるものと考える。

連絡先：045-949-7370